

——山梨県東山梨郡三富村——

見畠遺跡発掘調査報告書

1982. 3

三富村教育委員会
山梨県塩山土木事務所

——山梨県東山梨郡三富村——

見畠遺跡発掘調査報告書

三富村教育委員会
山梨県塩山土木事務所

序

見畠遺跡の発掘に想いを寄せて

このたび、一般国道140号線の村内未完成区域富部落見畠地区の工事着工に先立ちこの地区を発見した処見畠遺跡として伝承された通り、土壙55基集石土壙4基及び建物址跡（ピット）と思われるものの数個が発掘されました。

山梨県文化課の見解によれば、平安時代後期、今から800～1000年位前の遺構のようあります。若し墓穴と断定すれば当時の人々の住居跡が近くにあるよう想像されます。この山峡の村に先人が居住し始めた時代は定かでないが、この度の発掘で平安時代に既に人が住居していたことだけは明らかになりました。

県内に散在する大規模な遺跡出土品を見るにつけて、昔に変らぬ大自然そのままの村には、今も昔も住む人の少ない、何かそこに宿命的なものを感ぜざるを得ません。日本武尊が、雁坂峠を越えて碓氷から信州路へ、又壬申の乱以後多くの落人が身をかくして往来した秩父往還であるその周辺に土地の人が、或は又、難を逃れて住みついた人もいるだろう。文化的価値のある埋蔵品は見当らなかったが、ささやかながら生活を営んでいたその姿はこの発掘品を通じて偲ばれます。

現在の村は、交通至便この大自然はそ昔そのまま、人的的交流を計り、近代的文化的活力ある村づくりに精進することが、見畠遺跡に眠る先人への靈を慰める事にもなると思います。

昭和57年3月25日

三富村村長 萩原篤臣

見畠遺跡発掘に際して

国道140号線の用地見畠地内の発掘を、昭和56年10月より始められ、其の結果平安時代の土壙を発掘した。土壙がある以上何處かに住居があった事は確実で、さて何處にあったのかそれを探すのが課題である。

平安時代の生活文化経済はどうであったか、坂上田村麻呂が夷征大將軍になり貴族の政治が行なわれ、文化の発達により仏教も盛んになった。弘法大師や伝教大師など高僧により、各宗派が創設され有名な神社仏閣は此の頃に建設されたものである。

菅原道真や小野道風が学問を広め、此の頃万葉集や古今和歌集が始まられ我が国の文化が進展した時代であった。藤原氏の全盛もこの辺までで、源平の勢力に押され、源平は何度となく戦いを繰り返し、勝ったり負けたり戦国争乱の世となり負けた者は追われて山の中に入り、人目を忍び隠れ住み、この土地に定住したのではなかったろうか、そしてどんな生活をしていたものか考えると、興味深いものである。その生活や文化を探求する為の埋蔵文化財発掘に期待をし、それなりに絶ての人が真剣に調査した結果が今回の土壙の発見であり、調査の上に大きな収穫であった。今後本村に於ける古代文化や生活を探求する上に貴重な資料としてこれから研究に役立たせたいものである。

昭和57年3月25日

三富村教育長 日原龍雄

目 次

序 文

第 I 章 見畠遺跡の概要	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 遺跡の地理と歴史的環境	1
第 3 節 層 序	2
第 II 章 見畠遺跡の発掘調査	4
第 1 節 遺 槽	4
(1) 土 壤	5
(2) 集石土壙	6
第 2 節 遺 物	19
(1) 土 器	21
(2) 茅山式土器破片	21
第 III 章 考 察	22

挿図目次

第1図 遺跡の位置図.....	1
三高村位置図.....	1
第2図 トレンチ配置図.....	2
第3図 遺跡の層序.....	3
第4図 グリッド配置図.....	4
第5図 道構配置図.....	5
第6図 土壌実測図(1).....	6
第7図 " (2).....	8
第8図 " (3).....	10
第9図 " (4).....	12
第10図 " (5).....	14
第11図 " (6).....	16
第12図 " (7).....	18
第13図 茅山式土器破片拓本.....	20

表目次

第1表 土壌計測値表.....	21
第2表 土壌主軸方向表.....	22
第3表 土壌主軸方向測定図表.....	24

図版目次

1.	遺跡遠景	Fig 1
2.	遺跡近景	Fig 1
3.	発掘参加者	Fig 1
4.	作業風景	Fig 2
5.	土壤群検出状況（中央から東側）	Fig 2
6.	1・2・3・42・44号土壤・1号石土塙	
	塙	Fig 2
7.	5・43土壤	Fig 3
8.	6号土壤	Fig 3
9.	7・8・9号土壤	Fig 3
10.	10・55号土壤・2号集石土壤	Fig 4
11.	11・45号土壤	Fig 4
12.	12号土壤	Fig 4
13.	35・36・37号土壤	Fig 5
14.	土壤群検出状況（中央から）	Fig 5
15.	13・14号土壤	Fig 5
16.	15・16号土壤	Fig 6
17.	3号土壤・3号集石土壤	Fig 6
18.	土壤群検出状況（中央から南側）	Fig 6
19.	31・32・33・53号土壤	Fig 7
20.	29・30号土壤	Fig 7
21.	27・28・41号土壤	Fig 7
22.	23・24・25・26号土壤	Fig 8
23.	23・24・25・26・27・28・29・30・31・ 32・33・34・53・54号土壤	Fig 8
24.	38・39・47・52号土壤	Fig 8
25.	19・20・21・22・51号土壤	Fig 9
26.	17・18・49・50号土壤	Fig 9
27.	17・18・19・20・22・49・50・51号土壤	Fig 9

凡　　例

1. 本報告書は国道140号線、甲府-熊谷線建設に伴う発掘調査報告書である。
2. 本報告書作成の経費は、昭和56年度に山梨県塩山土木事務所と三富村教育委員会の契約による。
3. 発掘調査の担当及び原稿の執筆は日原喜昭が行った。
4. 本報告書の編集は、日原喜昭・伊藤正幸が行なった。
5. 遺物整理、整図、トレース、写真撮影は日原喜昭が行なった。
6. 用語・用字については出来るだけ統一した。
7. 遺構の実測図は $\frac{1}{3}$ に縮尺して記録した。
8. 遺物、整図は三富村教育委員会に保存してある。

調　　査　　組　　織

- 調査団長　日原龍雄（三富村教育長）
- 事務長　山口皓享（三富村教育委員会）
- 調査担当　日原喜昭（山梨学院大学卒業）
- 調査補助員　伊藤正幸（国学院大学）・由井峰雄・三谷稚章・鷹野保直（上智大学）
- 発掘参加者　岡部孝子・日原近子・日原きみよ・岡部操・齊藤さち江・坂本恵子・名取栄子・広瀬まなぶ・坂本さく子・藤井なみ子・梶野よし子
- 調査協力者　日原公守・雷区長樋口紀道・日原組土木

第Ⅰ章 見畠遺跡の概要

第1節 調査に至る経緯

この見畠地区は昭和49年県文化課の調査により、平安時代遺跡として県の埋蔵文化財包蔵地として登録され分布図にも見られる處である。昭和45年より始められた国道140号線拡幅工事の残された雷地区の用地買収中に、県文化課と塙山土木事務所、三富村教育委員会の三者合議の上発掘調査後に国道工事着工すべきであるという結論に達し、10月1日文化庁へ発掘届を提出し、昭和56年11月13日塙山土木事務所より調査の委託を受け、昭和56年11月15日発掘調査開始、第一次調査を昭和56年3月25日完了した。

第2節 遺跡の地理と歴史的環境

見畠遺跡は山梨県東山梨郡三富村大字川浦字雷に所在する。このことから雷遺跡と呼称されることもある。

遺跡は、東側には秩父山系の東沢渓谷、塙坂峠、笠取山、南側には富士山、西側には乾徳山、大平牧場を眺めることができ、且西側にあっては、西沢渓谷、鶴冠山、東沢渓谷から源を発し山梨県の中央を流れやがては富士川に合流する笛吹川を望むことができる比較的緩やかな笛吹川左岸の段丘地上に存在し、南西方向に山を持つ山間部に立地している。

調査区西半分は表土層からローム層までわずか15cmと浅いが、遺跡の立地している場所だけは表土層からローム層まで40cmを測る。古来より土地が比較的安定していたことが窺える。現在の



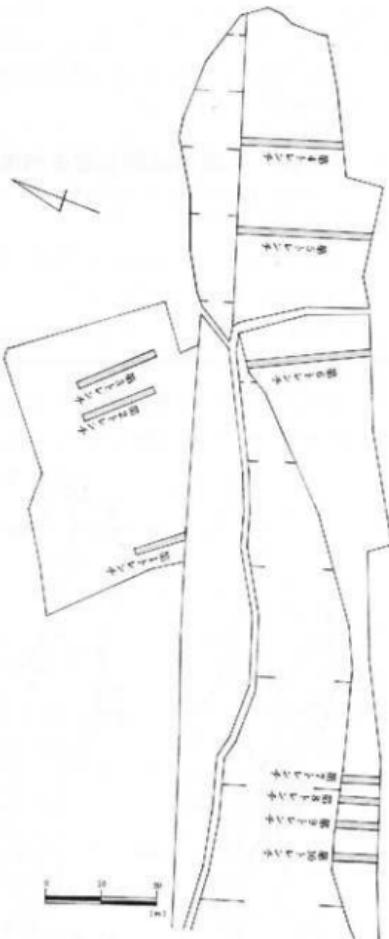
地目は桑畠が主である。このことはこの地が山間部特有の気温の低さ、日照時間の短かさが原因しているわけである。歴史的には知られていないが、「山梨県遺跡地名表」によればこの付近にはいくつかの遺跡が存在している。①雷遺跡、②原沢遺跡、③湯の平遺跡の3遺跡である。この内原沢遺跡については、この地の開墾中に遺物の出土が知られていたため土器採集を行った結果、縄文時代中期未曇利式土器Ⅲ～Ⅳとわかった。またこの付近には原沢遺跡によく似た尾根状の台地がいくつか存在しているため、まだ山林の中に眠る遺跡があるものと思われる。遺跡の近く東南方に20mには江戸中期末位いの五輪塔の存在も確認されている。

第3節 層序

見畑遺跡の標準層は調査区全体に10本のトレンチを入れ、その内の第2トレンチ西壁、第5トレンチ西壁の所見をもとに以下のように分類した。

(1) 第2トレンチ西壁層序は上位から下位に向って、①耕作土層、②黒褐色土層、③暗褐色土層、④黒褐色土層、⑤黄褐色ローム層の順に堆積している。このトレンチ内からの遺物の出土状況は縄文時代早期茅山式土器(7,000年前)の底部破片が一片ながら出土した程度であった。明確な遺構の検出は認められなかった。また第1、2、3トレンチを見るかぎりにおいてトレンチ内全体にローム層より上層に大きな山石が数多く検出された。これらの点から考察してみると、この地区全体にはこのような大きな山石が数多く散乱しているものと思われる。恐らくこの付近の山が崩れたおりここまで山石が流れ落ちてきたものと思われるが断言は出来ない。

(2) 第5トレンチ層序も上位から下位に向って①耕作土層、②黒褐色土層、③黄褐色ローム層の順に堆積している。地表面から③層までの深さはわずか40cmと浅い。この内②層は遺物包含層であり極少ながら土師器の破片が出土した。③層で一定

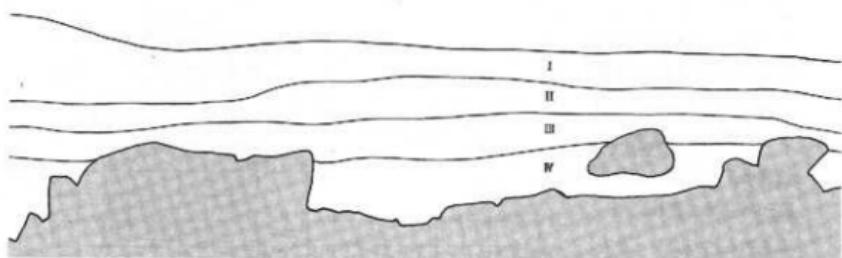


第2図 トレンチ配置図

の形状を呈す土壤の掘り込みを確認した。またこの層序は第6、7、8、9、10トレンチに共通するものではなく、第6、7、8、9、10トレンチに至っては①～③層までわずか15cmと浅く②層の確認は不明確であった。遺物、遺構などの検出はされなかった。

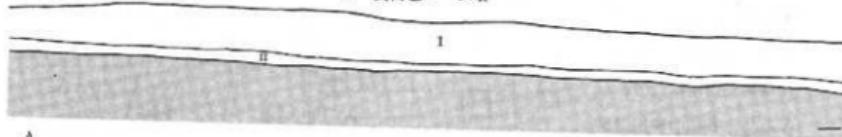
A

A'



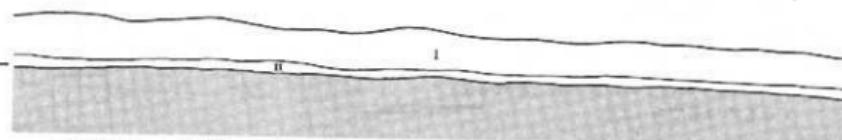
A区第2トレンチ西壁 セクション図

- I 耕作土層
- II 黒褐色土層（粒子細かく、粘性あり）
- III 暗 " (ロームブロックを多量に含み、粘性若干あり)
- IV 黒 " (ロームブロックを少量含み粘性あり)
- V 黄褐色ローム層



A

A'



B区第5トレンチ西壁 セクション図

- I 耕作土層
- II 黒褐色土層（若干ローム粒を含み、粘性あり）
- III 黄褐色ローム層

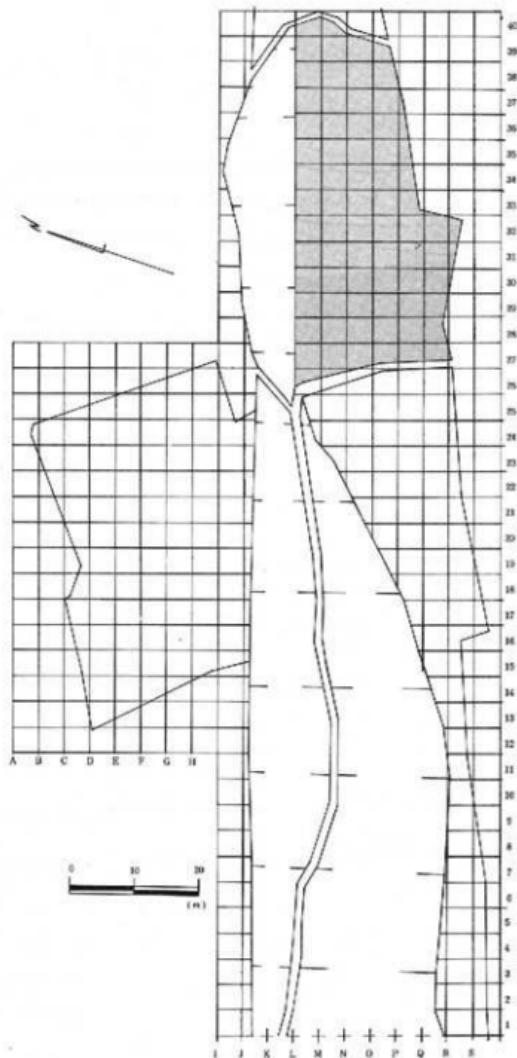


第3図 遺跡の層序

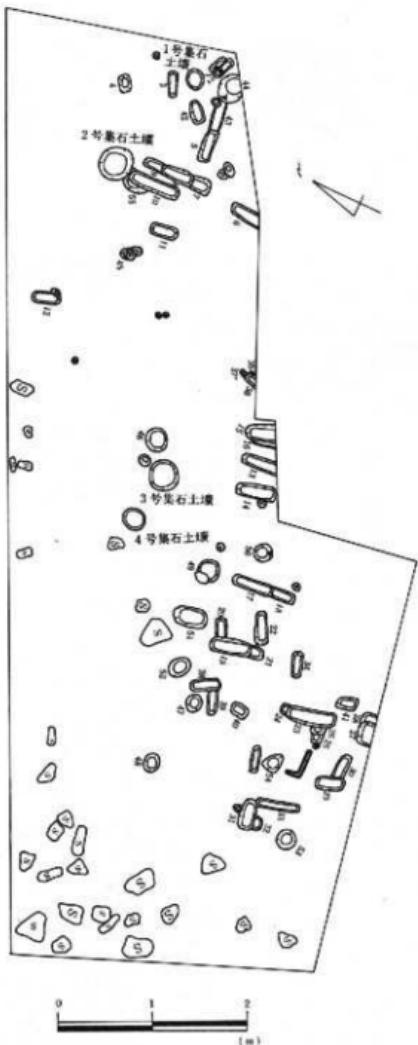
第II章 見畠遺跡の発掘調査

第1節 遺構

遺跡は比較的緩やかな傾斜を呈す段丘状台地に存在している。標高 732m を測り、斜面部低地との比高差は 1 m 90cm 前後を測る。段丘状台地北側よりを南西から北東に向い直進する国道 140 号甲府 - 熊谷線の路線に沿って 4 × 4 m のグリットを設定した。グリットは北から南へ A ~ S 、西から東へ 1 ~ 40 とし、A-1, A-2, …… と名付けた。調査区域内に段差があるため段下を A 区、段上を B 区と便宜的に呼称した。発掘調査面積は 1,072 m² であり、各区の検出遺構は、A 区なし、B 区土壙 55 基、集石土壙 4 基である。土壙 55 基の内長方形、長楕円形プランを呈するもの 43 基、円形プランを呈するもの 12 基であった。各遺構から極少ながら土師器の 10 世紀後半 - 11 世紀前半と思われる小細破片が出土している。この点において平安時代の遺構ではないかと考えている。



第4図 グリット配置図



第5図 土壌配置図

形プランを呈する。

確認面からの深さ25cmを測り土壌内には大きい石で長径20cm厚さ10cm前後、小さい石で長径4cm厚さ3cm前後を測る石が数多く入っている。土壌底面はほぼ平坦である。壁はややゆるや

(1) 土 壤

1. 2号土壠

これらの土壠はグリットO-39に位置し、1号土壠と2号土壠とは重複関係にある。新旧関係は2号土壠の方が新らしい。形状は、1号土壠北壁長1m10cm、確認面からの深さ25cmを測り、2号土壠と重複関係にあるので明確ではないが長方形プランを呈するものと思われる。土壠底面は平坦で西壁付近に浅いピットが付随するが土壠とは無関係である。壁は垂直に立ち上がる。

2号土壠は南北壁長1m40cm、東西壁長45cmを測る長方形プランを呈する。確認面からの深さ40cmを測り、土壠底面は平坦で南壁に深いピットが付随するが土壠とは無関係である。壁は垂直に立ち上がる。覆土は1.2号土壠とも黒褐色土で3層に分かれる。

3号土壠

グリットN-38、39に位置する。

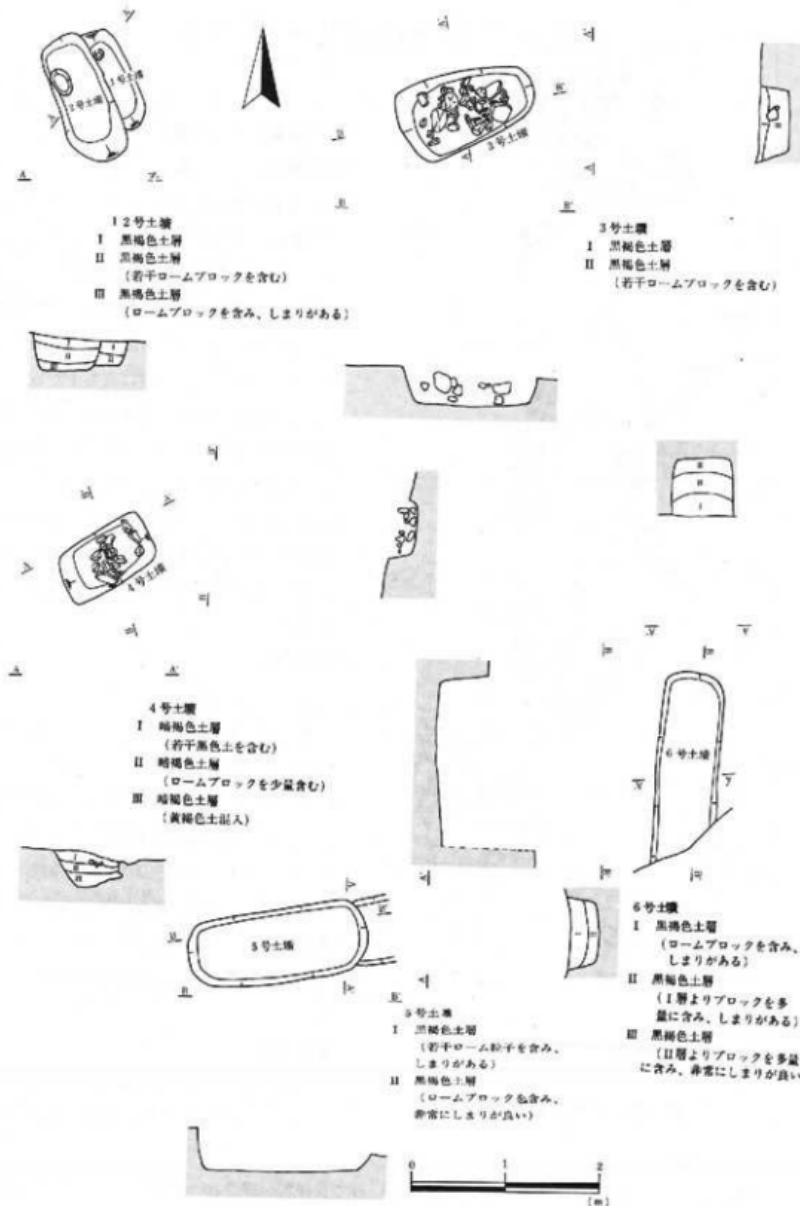
形状は、長径1m40cm、短径55cmを測る長楕円形を呈する。

確認面からの深さ30cmを測り、土壠内には大きい石で長径25cm前後厚さ15cm前後、小さい石で長径5cm厚さ3cm前後を測る石が数多く入っている。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色で2層に分かれる。出土遺物は土師器が少量出土した。

4号土壠

グリットN-38、39に位置する。

形状は、長径1m、短径55cmを測る長楕円



第6図 土壠実測図(1)

かに立ち上がる。覆土は暗褐色土で3層に分かれ。

5号土壙

グリットO-38に位置する。

形状は、南北壁長1m80cm、東西壁長70cmを測る長楕円形プランを呈する。

確認面からの深さ30cmを測り、土壙底面はやや丸みを呈し、壁は垂直に立ち上がる。

覆土は黒褐色土にロームブロックの多少で2層に分かれ。I、II層とも縫りがある。

6号土壙

グリットO、P-37に位置する。

形状は、調査区外に遺構がのびているため明確にすることは出来なかったが北壁長60cm、確認面からの深さ60cmを測る長方形プランを呈するものと思われる。土壙底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で3層に分かれ。全体に覆土の縫りが良くロームブロックを3層とも多量に含む。出土遺物は土師器が少量出土した。

7、8、9号土壙

これらの土壙はグリットN、O-37に位置し、7、8、9号土壙は重複関係にある。新旧関係は8号土壙が一番新らしく7、9号土壙についての新旧関係は不明確である。

7号土壙の形状は大部分が8号土壙に切られているため明確ではないが南北壁長90cm、確認面からの深さ60cmを測る長方形プランを呈するものと思われる。土壙底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土の明暗で3層に分かれ。出土遺物は国分式土器破片がわずかに出土した。

8号土壙の形状は、東西壁長1m90cm、南北80cmを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ75cmを測り土壙底面は平坦で北壁付近に径70cm前後の大きな自然石が存在する。壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土の明暗およびロームブロックの多少で3層に分かれ。出土遺物は7号土壙と同様である。

9号土壙の形状は、7号土壙同様に大部分を8号土壙に切られているため明確にすることは出来なかったが北壁長60cm、確認面からの深さ55cmを測る長楕円形プランを呈するものと思われる。土壙底面は平坦で北壁に径25cm前後の自然石が存在する。壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で3層に分かれ。

10号土壙

グリットM、N-37に位置し、44号土壙を切って存在する。

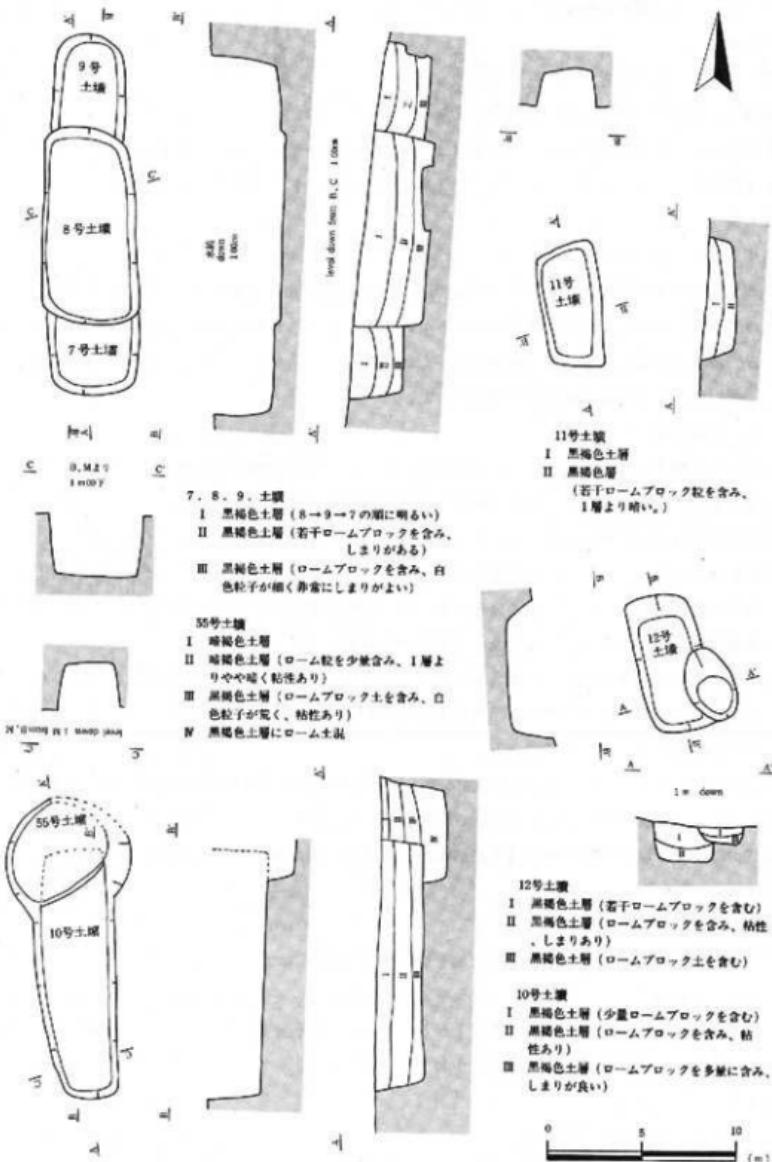
形状は、東西壁長2m60cm、南北壁長60cmを測る長方形プランを呈する。確認面からの深さ55cmを測り土壙底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土にロームブロックの多少で3層に分かれ。出土遺物は国分式土器破片がわずかに出土した。

11号土壙

グリットN-36、37に位置する。

形状は、東西壁長1m35cm、南北壁長65cmを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ35cmを測り土壙底面はやや丸みを呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は



第7図 土壤実測図(2)

黒褐色土の明暗で2層に分かれる。

12号土壌

グリットM-35、36に位置する。

形状は、東西壁長1m、南北壁長65cmを測る長楕円形プランを呈する。

確認面からの深さ40cmを測り土壌底面は平坦で東壁に浅いピットが付随するが土壌とは無関係である。壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で3層に分かれる。

13. 14. 15. 16号土壌

これらの土壌は、グリットP-33、34に位置し、15、16号土壌は重複関係にある。新旧関係は15号土壌が新らしい。

13号土壌の形状は、調査区外に遺構がのびているため明確にすることは出来ないが北壁長60cm、確認面からの深さ45cmを測る長方形プランを呈するものと思われる。土壌底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で3層に分かれる。II、III層とも織りがある。

14号土壌の形状は、東西壁長2m10cm、南北壁長60cmを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ30cmを測り土壌底面は平坦で西壁付近にピットが付随するが土壌とは無関係である。壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で4層に分かれる。II層はロームブロックを多量に含み織りが良い。出土遺物は上師器破片が若干出土した。

15号土壌の形状も13号土壌同様に調査区外に遺構がのびているため明確にすることは出来ないが北壁長80cm、確認面からの深さ25cmを測る長方形プランを呈するものと思われる。土壌底面は平坦で壁はややゆるやかに立ち上がる。

16号土壌の形状は、15号土壌との重複関係にくわえ遺構が調査区外にのびているため明確にすることは出来なかった。

17. 18号土壌

これらの土壌は、グリットP-32に位置し、17、18号土壌は重複関係にある。新旧関係は17号土壌の方が新らしい。

17号土壌の形状は、東西壁長1m80cm、南北壁長70cmを測る長方形プランを呈する。

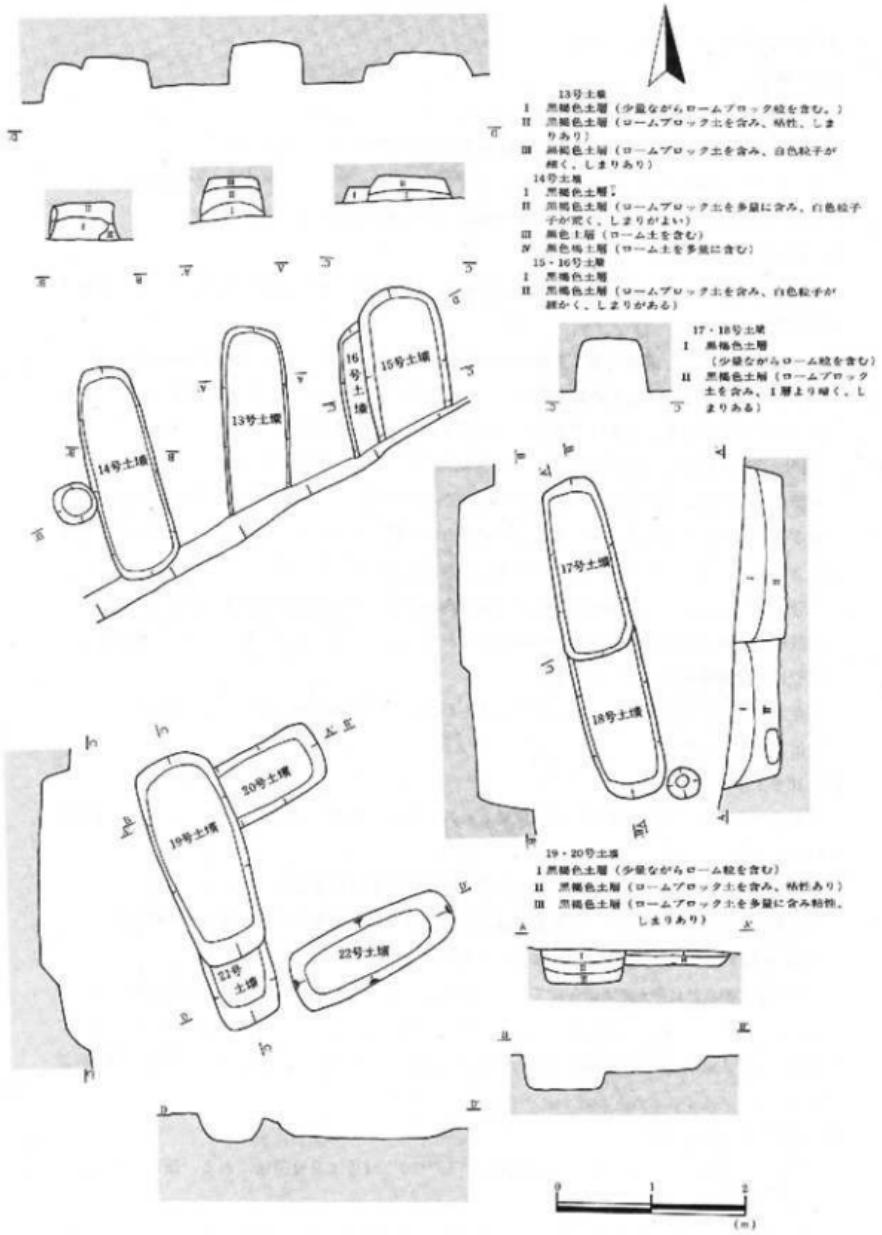
確認面からの深さ50cmを測り土壌底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土にロームブロックの多少および明暗で2層に分かれる。

18号土壌の形状は17号土壌に切られているため明確にすることは出来なかったが南北壁長65cm、確認面からの深さ50cmを測る長方形プランを呈するものと思われる。土壌底面は平坦で南壁付近に径36cm、厚さ15cm前後の石が存在する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はほぼ17号土壌と同様である。

19. 20. 21. 22号土壌

これらの土壌は、グリットP-31に位置し、19、20、21号は重複関係にある。新旧関係は19-21-20の順に新らしい。

19号土壌の形状は、東西壁長2m、南北壁長80cmを測る長方形プランを呈する。



第8図 土壌実測図(3)

確認面からの深さ35cmを測り土壌底面は平坦で壁はやや垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で3層に分かれる。

20号土壌の形状は17号土壌に切られているため明確にすることは出来なかつたが短径70cm、確認面からの深さ15cmを測る長楕円形プランを呈するものと思われる。土壌底面は平坦で壁はややゆるやかに立ち上がる。覆土は19号土壌とはほぼ同じである。

21号土壌の形状は19号土壌に大部分が切られているため不明確である。

22号土壌の形状は長径1m75cm、短径70cmを測る長楕円形プランを呈する。

確認面からの深さ15cmを測り土壌底面は平坦であるが壁に向い傾斜を呈し、ゆるやかに立ち上がる。

23. 24. 25. 26号土壌

これらの土壌は、グリットP. Q-30に位置し、23. 24. 25. 26号土壌は重複関係にある。新旧関係は23-24-26-25の順に新しい。

23号土壌の形状は、東西壁長2m10cm、南北80cmを測る長方形プランを呈する。確認面からの深さ65cmを測り、土壌底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。覆土は全体に締りのある黒褐色土にロームブロックの多少で3層に分かれる。出土遺物は土師器が極少ながら出土した。

24号土壌の形状は大部分が、23号土壌に切られているため明確には出来ないが北壁長70cm、確認面からの深さ40cmを測る。土壌底面は若干ながら南側に傾斜し、壁はゆるやかに立ち上がる。

25号土壌の形状は26号土壌に切られているため明確にすることは出来ないが短径80cm、確認面からの深さ35cmを測る。土壌底面は東側に傾斜し、壁は垂直に立ち上がる。西壁に付随するピットは土壌には無関係である。覆土は黒褐色土で3層に分かれる。

26号土壌も24号土壌同様その大部分を23号土壌に切られているために形状は明確にできなかつたが短径80cm、確認面からの深さ45cmを測る。土壌底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

27. 28号土壌

これらの土壌は、グリットQ. R-30に位置し、27. 28号土壌は重複関係にある。新旧関係は27号土壌の方が新らしい。

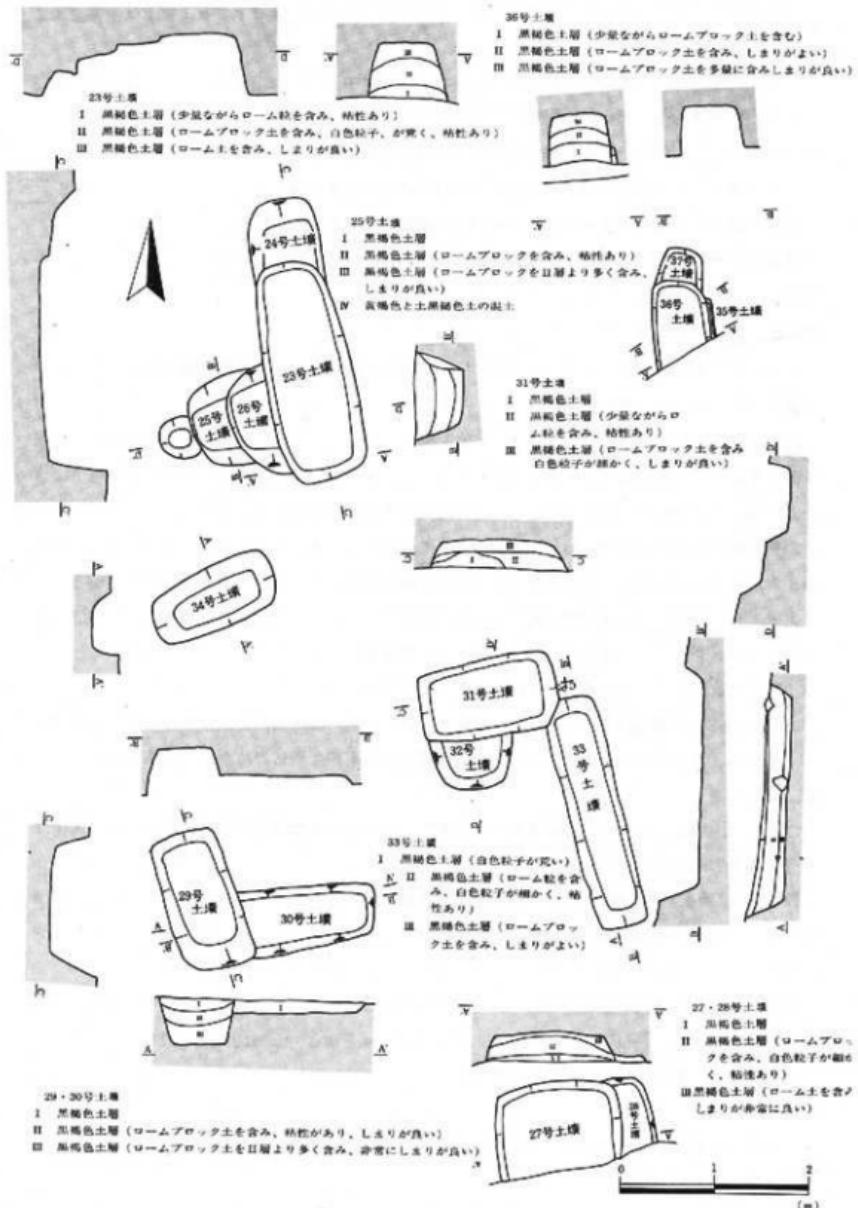
27号土壌は調査区外に遺構がのびているために明確にすることは出来なかつたが北壁長1m25cm、確認面からの深さ25cmを測る。土壌底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で3層に分かれる。Ⅲ層の覆土は非常に締りが良い。出土遺物は土師器破片が少量出土した。

28号土壌は27号土壌との重複関係にくわえ、調査区外に遺構がのびているため27号土壌と同様に明確にすることはできないが、確認面からの深さは5cmを測る。土壌底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で1層である。

29. 30号土壌

これらの土壌は、グリットQ-29. 30に位置し、29. 30号土壌は重複関係にある。新旧関係は29号土壌の方が新らしい。

29号土壌の形状は、東西壁長1m50cm、南北壁長65cmを測る長楕円形プランを呈する。確認面が



第9図 土壠実測図(4)

らの深さ30cmを測り、土壌底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土の明暗、ロームブロックの多少で3層に分かれ。II・III層とも縫りが良い。出土遺物は土師器破片が若干出土した。

30号土壙の形状は、29号土壙に切られているため明確にすることは出来ないが短径55cm、確認面からの深さ10cmを測る長辺円形プランを呈するものと思われる。土壙底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は黒褐色土である。

31. 32. 33号土壙

これらの土壙は、グリットP・Q-29に位置し、31. 32号土壙は重複関係にある。新旧関係は31号土壙の方が新らしい。

31号土壙の形状は、長径1m40cm、短径80cmを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ30cmを測り、土壙底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土で3層に分かれ。III層の覆土は縫りが良い。

32号土壙は大部分が31号土壙に切られているため形状は明確にすることはできないが、南壁長60cm、確認面からの深さは20cmを測る。土壙底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。

33号土壙の形状は、東西壁長2m、40cm、南北壁長50cmを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ30cmを測り、土壙底面は平坦であるがやや北側に傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分かれ。土壙中央部、北側確認面に石が存在する。出土遺物は土師器破片が少量出土した。

34号土壙

グリットP-31に位置する。

形状は、長径1m30cm、短径60cmを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ20cmを測り、土壙底面は平坦でややゆるやかに立ち上がる。

35. 36. 37号土壙

これらの土壙は、グリットP-35に位置し、35. 36. 37号土壙は重複関係にある。新旧関係は36号土壙が新らしく、34. 37号土壙については不明確である。

35号土壙は36号土壙との重複関係にくわえ、調査区外に遺構がのびているため遺存状態は非常に悪く不明確である。

36号土壙も調査区外に遺構がのびているため明確にすることはできないが、北壁長55cm、確認面からの深さ55cmを測る。土壙底面は平坦で垂直に立ち上がる。覆土は全体にロームブロックを含み、3層に分かれ。

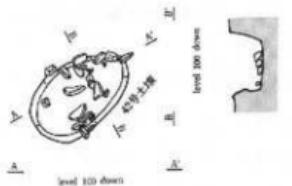
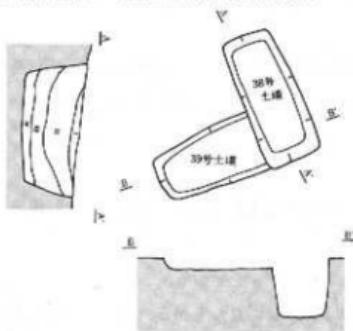
37号土壙は36号土壙に大部分切られ明確にすることはできないが、北壁長40cm、確認面からの深さ15cmを測る。土壙底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

38. 39号土壙

これらの土壙は、グリッドO・30. 31に位置し、38. 39号土壙は重複関係にある。新旧関係は38号土壙が新らしい。

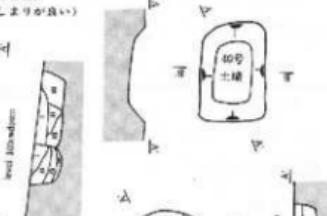
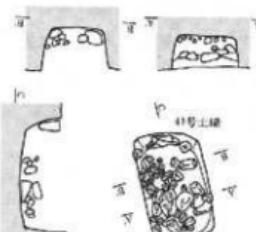
38号土壤

- I 黑褐色土層
 II 黑褐色土層（少量ながらロームを含み、粘性あり）
 III 黑褐色土層（ローム粒ブロック土を含み、しまりがよい）
 IV 黑褐色土層（ローム土を含み、非常にしりりが良い）



45号土壤

- I 黑褐色土層（ローム粒を含み、粘性あり）
 II 黑褐色土層（ロームブロック土を含む）
 III 黑褐色土層（ローム土を含み、しまりがよい）
 IV 黑褐色土と黄褐色土の混土。

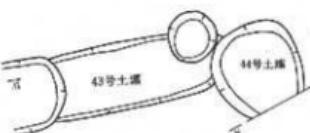
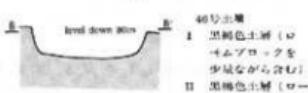


41号土壤

- I 黑褐色土層（ロームブロック土を含む）
 II 黑褐色土層（ローム土を含む）

44号土壤

- I 黑褐色土層
 II 黑褐色土層（ローム粒を若干含み、やや粘性あり）
 III 黑褐色土層（ロームブロック土を含み、しまりがよい）



- 47号土壤
 I 黑褐色土層
 (ローム土を含む)
 II 黑褐色土層
 (ロームブロック土を含み、白色粒子が多い)
 III 黑褐色土層
 (ローム土を含み、ややしまりがある)



第10図 土壌実測図(5)

(m)

38号土壇の形状は、長径1m40cm、短径60cmを測るを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ60cmを測り、土壇底面は平坦で壁は垂直に立ち上る。覆土は暗褐色土、黒褐色土で4層に分かれる。

39号土壇は38号土壇に切られているため明確にすることはできなかったが、短径50cm、確認面からの深さ15cmを測る長楕円形プランを呈するものと思われる。土壇底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

40号土壇

グリットP-30に位置する。

形状は、東西壁長90cm、南北壁長60cmを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ10cmを測り、土壇底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。

41号土壇

グリットQ-30に位置する。

形状は、東西壁長1m20cm、南北壁長70cmを測る長方形プランを呈する。

確認面からの深さ45cmを測り、土壇内には大きい石で長径20cm、厚さ12cm前後、小さい石で長径5cm、厚さ4cm前後の石が数多く入っている。土壇底面は若干丸みを呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は2層に分かれる。出土遺物は土師器破片が若干出土した。

42号土壇

グリットO-38に位置する。

形状は、長径1m15cm、短径60cm前後を測る不整長楕円形プランを呈する。

確認面からの深さ35cmを測り、土壇内には大きい石で長径25cm、厚さ15cm前後、小さい石で長径4cm、厚さ3cm前後の石が数多く入っている。土壇底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。

43、44号土壇

これらの土壇は、グリットO-38、39に位置し、43、44号土壇は重複関係にある。新旧関係は44号土壇が新らしい。

43号土壇は5、44号土壇に切られているため明確にすることは出来なかつたが、確認面からの深さ10cmを測る長楕円形プランを呈するものと思われる。土壇底面は平坦で北壁東側にピットが付随するが、土壇とは無関係である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

44号土壇は、遺構の4分の1程度が調査区外にあるため、その全容を明確にすることはできなかつたが、径95cmを測る楕円形プランを呈するものと思われる。

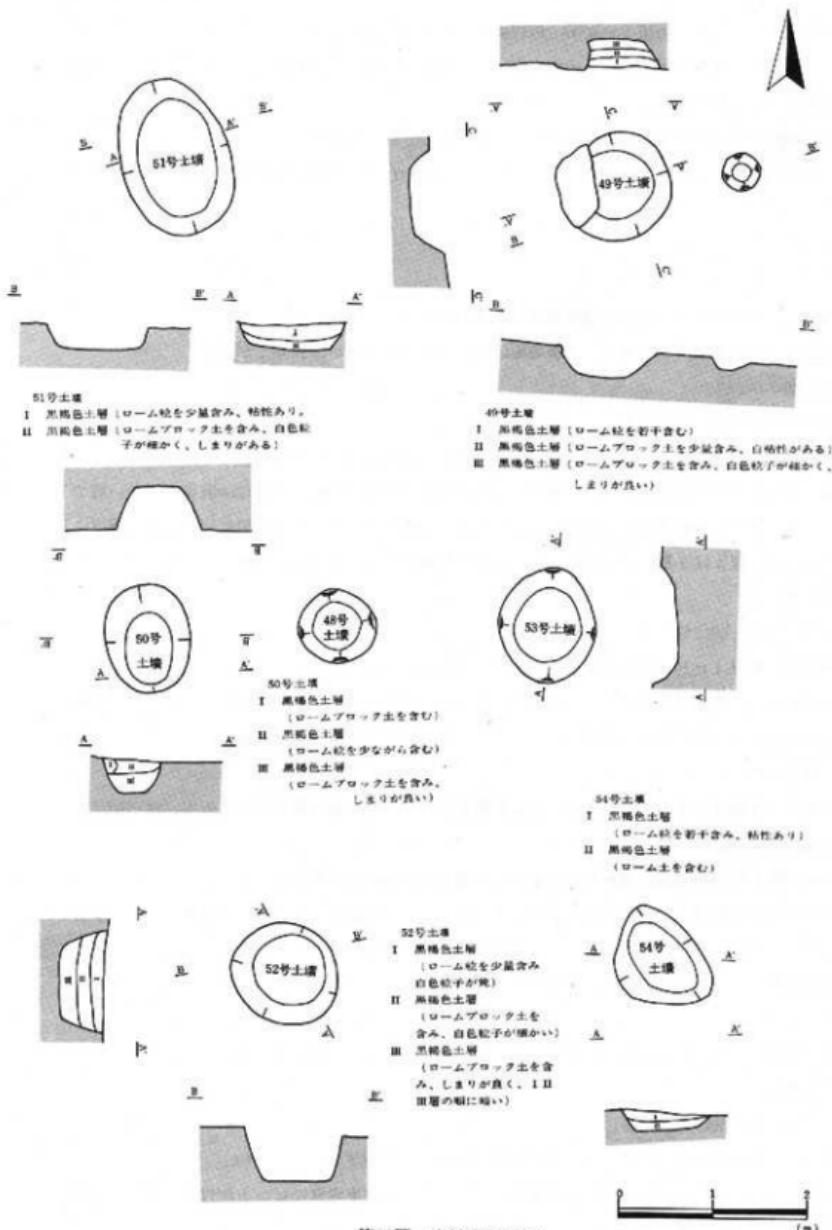
確認面からの深さ15cmを測り、土壇底面は若干丸みを呈する。覆土は3層に分かれる。

45号土壇

グリットN-36に位置する。

形状は、長径1m10cm、短径80cmを測る楕円形プランを呈する。

確認面からの深さは25cmを測り、土壇底面は平坦で、ほぼ東側壁にピットが付随するが、土壇とは無関係である。覆土はロームブロックの多少で3層に分かれる。



第11図 土壤実測図(6)

46号土壤

グリット O—34に位置する。

形状は、径1m20cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ25cmを測り、土壤底面は若干丸みを呈する。遺存度は良い。覆土は明暗で2層に分かれる。I. II層とも縦りがある。

47号土壤

グリット O—31に位置する。

形状は、径80cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ25cmを測り、土壤底面はやや丸みを呈する。遺存度は良い。覆土は3層に分かれる。

48号土壤

グリット O—29に位置する。

形状は、径40cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ10cmを測り、土壤底面は若干丸みを呈する。

49号土壤

グリット O—32に位置する。

形状は、径1m10cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ30cmを測り、土壤底面は若干丸みを呈する。西側壁に自然石が存在し、また、東側壁付近にはピットが付随するが、これらは土壤とは無関係である。覆土は3層に分かれる。

50号土壤

グリット P—32に位置する。

形状は、長径1m15cm、短径90cmを測る楕円形プランを呈する。

確認面からの深さ45cmを測り、土壤底面は平坦である。覆土は3層に分かれる。

51号土壤

グリット O—31, 32に位置する。

形状は、長径1m70cm、短径1m15cmを測る楕円形プランを呈する。

確認面からの深さ25cmを測り、土壤底面は若干丸みを呈する。覆土は全体に縦りのある土で2層に分かれる。

52号土壤

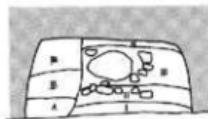
グリット O—31に位置する。

形状は、径1m10cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ45cmを測り、土壤底面は平坦である。遺存度は非常に良い。覆土はロームブロック、明暗で3層に分かれ、全体に縦りが良い。出土遺物は、土師器が極少ながら出土した。

53号土壤

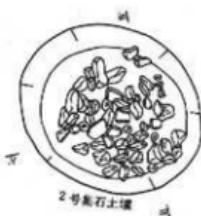
グリット P, Q—28, 29に位置する。



2号集石
I 黒褐色土層 (ローム粒を若干含む)
II 黑褐色土層 (ロームブロック土を含み、白色粒子が聞く。粘性あり)
III 黑褐色土層 (ロームブロック土を含み、II層より暗く、粘性あり)
IV 黑褐色土層 (ロームブロック土を含み、黒層より暗く、少量の砂利を含む)
V 黑褐色土層 (少量のローム粒を含み、やや粘性あり)
VI 灰褐色土層 (ロームブロック土を含み、白色粒子が聞く。粘性あり)
VII 灰褐色土層 (ロームにコム土混入)

V

V



- 2号集石土壠
I 黑褐色土層
(ローム粒を若干含み、しまりが良い)
II 黑褐色土層
(ロームブロック土を含み、白色粒子が聞く。しまりが良い)
III 黑褐色土層
ロームブロック土を含み、非常にしまりが良い
IV 黑褐色土層
(ロームブロック土を多量に含む)



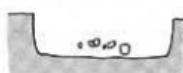
V

V



V

V



0 1 2 (=)

2号集石

- I 黒褐色土層 (ローム粒を若干含む)
II 黑褐色土層 (ロームブロック土を含み、白色粒子が聞く。粘性あり)
III 黑褐色土層 (ロームブロック土を含み、II層より暗く、粘性あり)
IV 黑褐色土層 (ロームブロック土を含み、黒層より暗く、少量の砂利を含む)
V 黑褐色土層 (少量のローム粒を含み、やや粘性あり)
VI 灰褐色土層 (ロームブロック土を含み、白色粒子が聞く。粘性あり)
VII 灰褐色土層 (ロームにコム土混入)

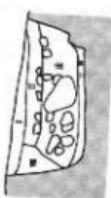
質地難易度土層 (少量のローム粒を含み、やや粘性あり)

質地難易度土層 (ロームブロック土を含み、白色粒子が聞く。粘性あり)

質地難易度土層 (ロームにコム土混入)

100 down from B.M.

100 down from B.M.



1号集石

- I 黑褐色土層
(ローム粒を若干含む)
II 黑褐色土層
(ロームブロック土を含
粘性あり)
III 黑褐色土層
ロームブロック土を含み、白色粒子が細
白色粒子が細かくしまり
がある)



level 100 down



4号集石

- I 黑褐色土層
(ローム粒を含み、白色粒子
が聞く。しまりが良い)
II 黑褐色土層
(ロームブロック土を含み、白色粒子が細かく
白色粒子が細かく。しまりが良い)



V

V

第12図 土壠実測図(7)

形状は、径1m15cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ15cmを測り、土壤底面は若干丸みを呈し、傾斜する。

54号土壤

グリットP-29, 30に位置する。

形状は、長径1m20cm、短径95cmを測り上面では隅丸三角形を呈し、底面ではほぼ橢円形を呈する状態であった。

確認面からの深さ10cm、土壤底面は平坦であるが、やや傾斜する。覆土は2層に分かれれる。

55号土壤

グリットN-37に位置する。

55号土壤は南側に10号土壤、北側に2号集石土壤があり双方と重複関係にある状態で存在する。新旧関係は2号集-10-55号土壤の順である。

形状は、双方に切られているために上面は明確ではないが、底面はほぼ橢円形プランを呈する状態であった。

確認面からの深さ70cmを測り、土壤底面は平坦である。覆土は黒褐色土、暗褐色土、明暗、ロームブロックの多少で4層に分かれれる。出土遺物は土師器破片が極少ながら出土した。

(2) 集石土壤

1号集石土壤

グリットO-38, 39に位置する。

形状は、径1m15cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ20cmを測り、土壤底面はほぼ平坦で土壤内には大きい石で長径25cm、短径20cm、厚さ15cm前後、小さい石で長径10cm、短径7cm、厚さ5cm前後の石が数多く入っている。遺存度は良い。覆土はロームブロック混入で3層に分かれれる。

2号集石土壤

グリットN-37, 38に55号土壤を切って存在する。

形状は、径1m90cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ80cmを測り、土壤底面は平坦で土壤内には大きい石で長径50cm、短径40cm、厚さ40cm、小さい石で長径10cm、短径8cm、厚さ6cm前後に測る石が沢山入っている。遺存度は良好である。覆土は明暗、ロームブロック、少量の砂利、覆土の綿りで分かれれる。

3号集石土壤

グリットN, O-33に位置する。

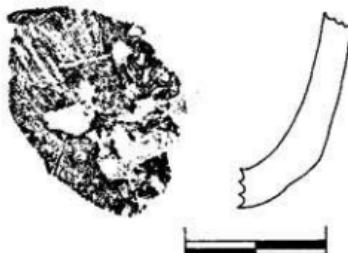
形状は、径1m50cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ40cmを測り、土壤底面は平坦で土壤内には大きい石で長径30cm、短径20cm、厚さ15cm前後、小さい石で長径10cm、短径8cm、厚さ6cm前後の石が数多く入っている。遺存度は良好である。覆土は全体に綿りがあり、ロームブロック混入で4層に分かれれる。出土遺物は土師器破片が極少ながら出土した。

(cm)

No	形狀	長径	短径	深さ	出土遺物	備考
1	長方形	1.10		25		
2	長方形	1.40	45	40		
3	長椭円形	1.40	55	30	土師器少量	
4	長椭円形	1.00	55	25		
5	長椭円形	1.80	70	30	土師器少量	
6	長方形		60	60	土師器少量	
7	長方形		90	60	土師器少量	
8	長方形	1.90	80	75	*	
9	長椭円形		60	55		
10	長方形	2.40	60	55		
11	長方形	1.35	65	35		
12	長椭円形	1.40	65	40		
13	長方形		60	45		
14	長方形	2.10	60	30	土師器少	
15	長方形		80	25		
16	不明					不明確
17	長方形	1.80	70	50		
18	長方形		65	50		
19	長方形	2.00	80	35		
20	長椭円形		70	15		
21	不明					不明確
22	長椭円形	1.75	70	15		
23	長方形	2.10	80	65	土師器少	
24	不明		70	40		
25	*		80	35		
26	*		80	45		
27	*	1.25		25	土師破片少量	
28	*			5		
29	長方形	1.50	65	30	土師破片少	
30	長椭円形		55	10		
31	長椭円形	1.40		80	30	
32	不明				60	20
33	長方形	2.40		50	30	土師器少量
34	長椭円形	1.30		60	20	
35	*					不明確
36	*			55	55	
37	*			40	15	
38	長方形	1.40		60	60	
39	長椭円形				50	15
40	長方形	90		60	10	
41	長方形	1.20		70	45	土師器少量
42	不明	1.15		60	35	
43	長椭円形					10
44	楕円形	95				
45	楕円形	1.10		80	25	
46	円形	1.20			25	
47	円形	80			25	
48	円形	40			10	
49	円形	1.10			30	
50	楕円形	1.15		90	45	
51	楕円形	1.70		1.15	25	
52	円形	1.10			45	土師破片少
53	円形	1.15			15	
54	楕円形	1.20			10	
55	楕円形				70	
3号断面	円形	1.15			20	
3*	円形	1.90			80	
3*	円形	1.50			40	土師破片少
4*	円形	1.10			20	*

第1表 土壤計測値表



第13図 茅山式土器片拓本

4号集石土壙

グリットN-33に位置する。

形状は、径1m10cmを測る円形プランを呈する。

確認面からの深さ20cmを測り、土壤底面は平坦である。土壤内は大きい石で20cm、短径15cm、厚さ10cm、小さい石で長径5cm、短径5cm、厚さ4cm前後を測る石が入っている。遺存度は良好である。覆土は2層に分かれる。出土遺物は土師器破片が極少ながら出土した。

第2節 遺 物

(1) 土 器

今回の調査では平安時代に推定される土師器の小細破片ばかり百点前後出土し、完形品0という結果であった。またA区第2トレンチIV層からは縄文時代早期茅山式尖底土器(約7000年前)の底部破片が一片ながら出土した。

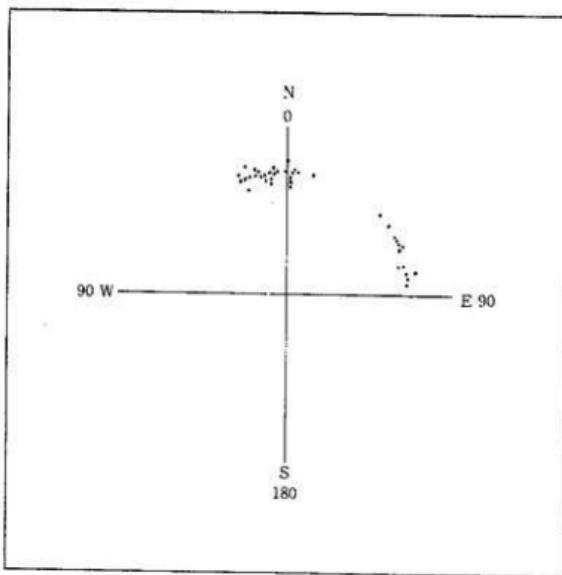
(2) 茅山式土器破片

尖底部より約3cm上の器面には条痕がみられる。胎土には纖維、石英粒子若干を含み、焼成はかたく良好で尖底部の器厚は1.3cmを測る。

第III章 考 察

今回の調査で発見された遺構は長方形、長楕円形、円形、集石土壤の計59基であった。この内長方形、長楕円形プランを呈する土壤は43基と一番多かった。とりわけこの43基の土壤の主軸及び若干の検討を述べてみたい。

43基中の土壤の主軸には2種類ある。1つには主軸を東西よりもつもの、2つには主軸を南北よりもつものである。この両者についての比較はほぼ2:1の割合で主軸を南北よりもつ土壤の方が多い。前者東西よりもつ土壤には3, 4, 5, 20, 22, 25, 26, 30, 31, 34, 39, 42, 43号土壤の13基があり、土壤プランは不明確な25, 26号土壤をのぞき、長楕円形プランを呈している。またこれらの土壤の深さは確認面からさほど深くなく、最高26号土壤の45cm、最低30, 43号土壤の10cm、土壤の全体平均20~30cm程度であった。3, 4, 42号土壤内からは長径25cm、短径15cm、厚さ5cm前後を測る石が数多く検出された。遺物の出土状況としては3, 5号土壤から土師器の小細破片が2, 3点ばかり出土した程度であった。20, 25, 26, 30, 39号土壤などは、後者の19, 23, 29, 38号土壤によって切られて存在している。後者南北よりもつ土壤には1, 2, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 21, 23, 24, 29, 32, 33, 36.



第2表 土壤主軸方向表

No.	主 軸	偏 考	No.	主 軸	偏 考	No.	主 軸	偏 考
1	N-22°-W		16	N-7°-W		31	N-80°-E	
2	N-22°-W		17	N-11°-W		32	N-5°-W	
3	N-68°-E		18	N-11°-W		33	N-14°-W	
4	N-56°-E		19	N-18°-W		34	N-66°-E	
5	N-82°-E		20	N-62°-E		35	不 明	
6	N-5°-E		21	N-18°-W		36	N-2°-E	
7	N-1°-E		22	N-64°-E		37	N-12°-E	
8	N-1°-E		23	N-8°-W		38	N-20°-W	
9	N-1°-E		24	N-8°-W		39	N-67°-E	
10	N-90°-N		25	N-76°-E		40	N-3°-E	
11	N-8°-W		26	N-76°-E		41	N-15°-W	
12	N-15°-W		27	不 明		42	N-50°-E	
13	N-1°-W		28	不 明		43	N-80°-E	
14	N-15°-W		29	N-20°-W				
15	N-7°-W		30	N-85°-E				

第3表 土壤主軸方向測定置表

37. 38. 40. 41号土壙の27基があり、土壙プランは不明確な16. 21. 24. 32. 36. 37号土壙をのぞき、長方形、長楕円形プランを呈している。確認面からの深さは最高8号土壙の75cm、最低40号土壙の10cm、土壙の全体平均は45~55cm程度を測り、前者よりも深い。41号土壙内からは前者に見られるような径20cm、厚さ15cm前後を測る石が数多く検出された。遺物の出土状況としては6. 7. 8. 14. 23. 29. 33. 41号土壙内から土師器の小細破片がやはり2. 3点程度だが出土した。また、これらの小細破片の多くは10世紀後~11世紀初にかけて見られる破片であった。7号土壙から出土した口縁部破片は国分式土器の杯の一部である。19. 23. 29. 38号土壙は前者の20. 25. 26. 30. 39号土壙を切って存在する。

以上兩者からいえる事は、主軸を東西よりもつ土壙が南北よりもつ土壙に切られ、且、前者は確認面からの深さは浅く、形状は長楕円形プランを呈するが、後者は長方形、長楕円形プランというふうにまちまちである。これらの土壙の時期については資料不足のため不明確ではあるが主軸を東西より、南北よりもつ土壙内からの土師器小細破片を見るかぎりにおいては両者とも平安時代における土壙の切り合い造構であろう。また今回の調査では発見されなかつたが、これらの土壙に伴う住居址跡が遺構の付近に存在しているのではないかと思われる。

図 版

1. 遺跡遠景（東北より）



2. 遺跡近景（東より）



3. 発掘参加者





4. 作業風景



5. 土壌群排出状況
(中央から東側)



6. 1・2・3・42・44号
土壤、1号集石土壤



7.5·43号土壤



8.6号土壤



9.7·8·9号土壤

10. 10·55号土壤、
2品集石土壤



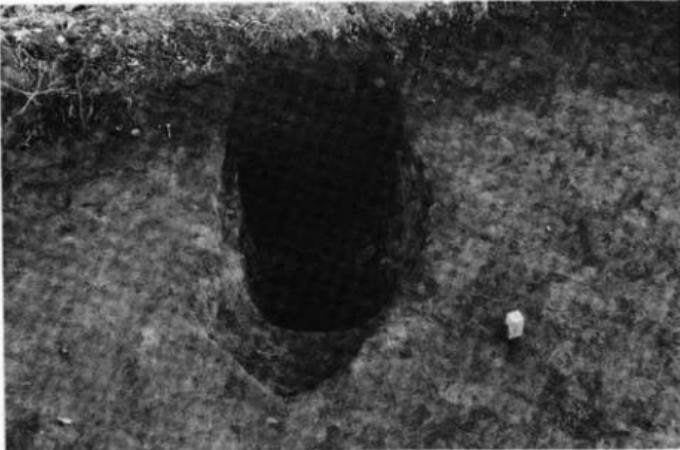
11. 11·45号土壤



12. 12号土壤



13. 35・36・37号土壤



14. 土壌群検出状況
(中央から)

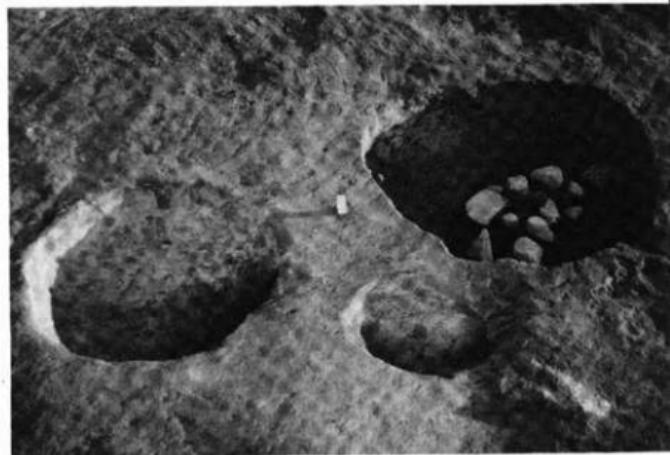


15. 13・14号土壤





16. 15・16号土壤



17. 3号土壤、3号集石土壤

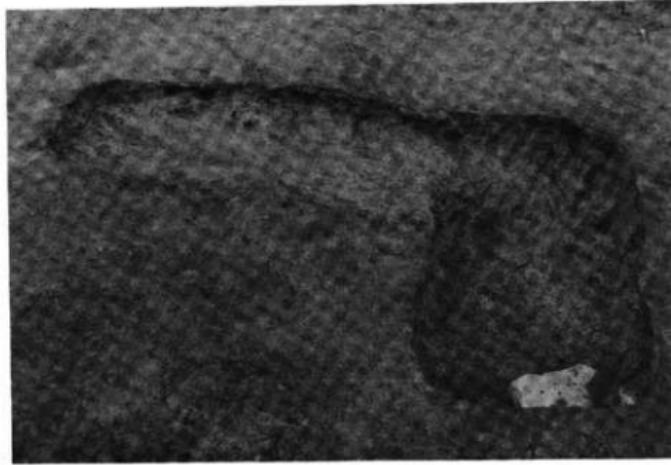


18. 土壤群検出状況

(中央から南側)



19. 31 • 32 • 33 • 53号土壤

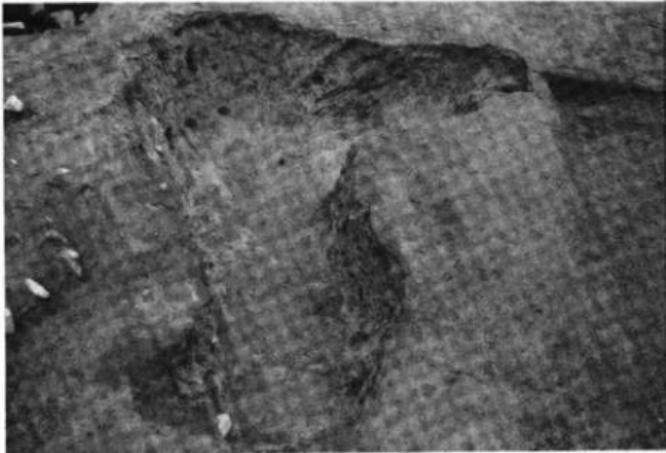


20. 29 • 30号土壤

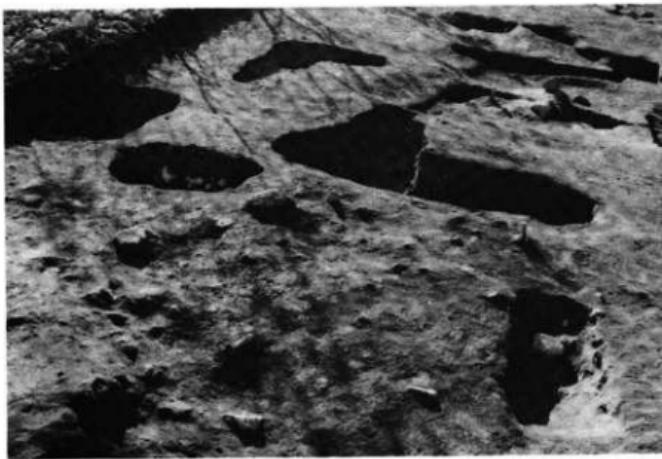


21. 27 • 28 • 41号土壤

22. 23 • 24 • 25 • 26号土壤



23. 23 • 24 • 25 • 26 • 27 •
28 • 29 • 30 • 31 • 32 •
33 • 34 • 35 • 36号土壤



24. 38 • 39 • 47 • 52号土壤

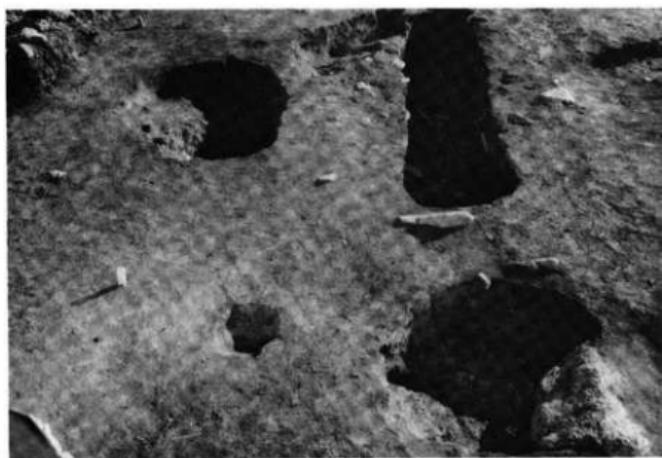


25. 19 • 20 • 21 • 22 •

51号土壤



26. 17 • 18 • 49 • 50号土壤



27. 17 • 18 • 19 • 20 • 21 •

22 • 49 • 50 • 51号土壤



山梨県・三富村

見 番 遺 跡

印刷 昭和57年3月25日

発刊 昭和57年3月31日

発行所 山梨県三富村

山梨県塩山土木事務所

印刷所 ヨネヤ印刷

